

小豆支部 活動報告

1 研究主題

確かな学力を育むための

「わかる授業」の創造
ー教育メディアを活用した授業づくりー

2 はじめに

小豆支部では、昨年度までにタブレット PC をはじめとする ICT 機器の活用について研究を続けてきた。それに併せて、今年度開催された四国放送教育研究会愛媛大会での研究提案発表に向け、授業における放送番組の活用についての研究も行ってきた。今年度は、10 月下旬に研究提案発表を控えていたことから、放送番組の活用に重点をおいて研究を進めることとなった。

3 研究内容

(1) 提案にあたって

映像教材を活用するメリットは、学習内容をより身近なものに感じさせ、興味・関心を喚起することができたり、実際には体験しづらいことを、いかにも体験しているかのように感じることができたりするという点にある。また、何度も繰り返し視聴したり、一場面のみを止めて見たりすることもできるため、より個に応じた課題解決に向けた活用が期待できるという点もあると考えられる。

小豆支部では、「確かな学力を育むための『わかる授業』の創造ー教育メディアを活用した授業づくりー」をテーマに、メディア機器やメディア教材を活用したわかる授業の研究に取り組んでいる。その一環として、「NHK for School」などの放送番組を活用した授業にも取り組み、映像教材活用のメリットを「わかる授業」の創造に生かすための実践も行った。その中で、活用する教材やその活用方法について研究を進めることとなった。

(2) 活用した放送番組

授業を行う教室環境の違いに合わせ、インターネットが利用できない教室では「10min. ボックス」や「NHKまる得マガジン」などのNHK放送番組を録画したものを、利用できる教室では「NHK for School」の番組及びビデオクリップを活用した。

(3) 活用事例

① 国語科における事例

題 材：3 年「挨拶ー原爆の写真によせて」
番 組：10min. ボックス現代文「戦争と平和の詩」

ねらい：「挨拶」の詩と「私が一番きれいだったとき」との共通点や相違点の理解と、深い読みの手がかりを得る。

反 応：映像を見ることで、詩をより身近に感じられていた。詩を単純に比較するときよりも、頭に入りやすく考えやすかった。

成 果：生徒を引き付けたり理解を促すには、とても有効であった。

課 題：読みを深めたり思考を促すための手だてや工夫が必要である。



② 技術・家庭（家庭分野）による事例

題 材：1 年「和服の文化」

番 組：NHKまる得マガジン「初めてでも安心 ゆかたのすっきり着付け術」

インターネット上で公開されていない番組のため、録画したものを活用した。

ねらい：浴衣の着装の手順の難しさを放送番組を見て学び、上手に着装体験ができるようにする。

感 想：帯の結び方は、映像で見られて

よく分かった。
一度だけでなく、何度も見られたので分かりやすかった。
自分一人で着られるようになった。
着付け方が分かったので、旅行で旅館などに行った時に着てみたい。
映像の内容が分かりやすく、手順に困っているなかまに上手く着付け方を教えることができた。

成 果：映像で示すことができるので、作業のポイントを押さえやすかった。
何度も再生できるので、生徒が自分自身で課題解決することができた。

課 題：作業のポイントが多い授業では再生機器の数を増やす必要がある。



③ その他の事例

- 1 年国語「流水と私たちの暮らし」
ビデオクリップ「北海道 寒さと流水」「地球温暖化とは」
- 2 年国語「走れメロス」
番組「おはなしのくに 走れメロス」「10min.ボックス現代文 走れメロス」
- 3 年国語「月の起源を探る」
ビデオクリップ「月はどうやってできたのか」
- 3 年国語「論語」
番組「おはなしのくにクラシッ

ク 論語」

「論語 3 択クイズ」

3 年理科「力の規則性 慣性の法則」

番組「考えるカラス第3回」

3 年数学「学習の総まとめ」

録画番組「 π の話」

(4) 研究の成果と課題

生徒の興味・関心を高めたり、内容理解をより深めたりすることに役立った。そして、学習活動をより楽しもうとする意欲を高めたりすることにも大いに役立った。また、授業の中では主体的な取り組みが見られ、学習内容が定着し、達成感が感じられた生徒も増加している。さらに、他の題材や単元においても、放送番組を活用した学習を望んでいるという生徒の声が得られた。

このような成果に基づき、今後も多くの教科の学習において、放送番組が活用できるよう、研究を継続していきたいと考えている。より高い効果が得られるように、特に放送番組の活用場面、活用方法、活用手段などについて探っていくことが重要であると考えている。ただ、番組があまり充実していない教科もあることから、教科の枠を超えて流用できる放送教材を探し出していくことも大きな課題であると言える。活用頻度を上げ、分かる授業づくりにつながるよう、そのような教材をリストアップし、いつでも誰でも活用できる環境の構築をめざしたいと考えている。

4 今後の課題

今年度は、秋に放送教育研究会四国大会での提案発表を控えていたということで、内容を放送教育1本に絞って研究を進めてきた。来年度以降は、この取り組みを生かしつつ、メディア機器やメディア教材の活用についても再び研究を進めていかなければならない。小豆郡内では、小学校へのタブレットの導入もどんどん進んでいる。小学校との情報交換も行いながら、メディア機器やメディア教材の効果的な活用について探ることも今後必要となりそうである。